

朝日新聞所蔵写真から

戦後70年

あの日の暮らし ⑨

1945年(昭和20年)

昨日の敵は笑顔だった

駐屯地になった学校から、通りかかる日本人に親しげに声をかける進駐軍兵士。1945年9月

デジタル版にトビックスページ



にこやかにほほ笑む大勢の進駐軍。珍しそうに見上げる子ども。終戦の1945年8月15日から、1カ月半後の光景だ。場所は大阪府八尾市の旧制八尾中学校(現八尾高等学校)。

9月25日以降、数回に分かれて大阪入りした進駐軍の駐屯地のひとつだ。同校に通っていた藤田徹夫さん(88)は、当時の様子をよく覚えている。学校の運動場には次々と臨時トイレが造られ、兵士たちは、朝食後に校舎の柵に腰掛けて、くつろいでいたという。「写真そのものの光景。『鬼畜米英』と教えられていたのに、とてもソフトな人当たりで想像と違って驚いた」

初めて見る外国人に不安な気持ちがあったが、覚え立ての英語で話しかけた。周りには、アメリカへの憎しみをあらわにする人たちもいたが、英語で話しかけることで、卑屈になりそうな自分を勇気づけたいと思った。

関西学院大学教授(日本近現代史)の高岡裕之さん(88)は、「敗戦を許せず自殺する人、軍国主義しか知らず虚脱状態に陥る人、抑圧から解放されて安堵する人。世代や境遇によって終戦の受け止め方は様々だった」と話す。

それでも、空襲の恐怖は去り、夜の街には明かりが戻った。戦後が始まった。

(佐藤慈子)